ヨーロッパの妙好人と「無対辞」の思想

――ハリー・ピーパー師の事績を通して[1]――

那須英勝

はじめに

柳宗悦（一八八九―一九六一）の思想的到達点とされる無対辞[2]の思想は、二元的に相対する対辞の世界を超克する東洋思想に特徴的な不二の思想に基づくものであり、そしてこの無対辞の境地の活きた例として、柳は真宗の妙好人を取り上げていることも知られている。[3]しかし柳は、中世フランスに生きたカルメル会のカトリック修道士であったブラザー・ローレンス（一六一一―一六九一）をキリスト教圏内にこの無対辞の思想を体現して現れた「妙好人」と認める等、[4]無対辞の思想が日本や東洋にのみ認められるのではなく、西洋にも開かれた普遍性を持った思想であると考えていたようだ。[5]この無対辞の思想の持つ普遍性について、第二次世界大戦後のドイツ（ベルリン）で浄土真宗に帰依し、没後もヨーロッパの念仏者の間で妙好人として慕われるハリー・ピーパー師（Karl Erdmann Harry Pieper 1907-1978）の事績を通して検討してみたい。[6]

ハリー・ピーパー師と浄土真宗の出会い

ハリー・ピーパー師は、第二次世界大戦後のドイツ（ベルリン）において浄土真宗に帰依し、ヨーロッパで初めて真宗協会を結成したヨーロッパにおける浄土真宗の先駆者であり、現在でもヨーロッパの念仏者の間で「妙好人」として慕われている。(7)

ピーパー師は、第二次世界大戦前からベルリンで、上座部仏教徒のグループで活動し、その代表者にもなっていたようである。このグループは一九四二年にはナチ当局によってドイツの仏教教団が解散させられた際に消滅するが、ピーパー師自身は、戦時中も仏教への信仰を失うことはなかった。ピーパー師は、二年間のソ連抑留後、ベルリンに帰還し、ベルリンに進駐していたアメリカ軍基地の通訳として仕事をしながら、ようやく再開された仏教教団で在家仏教徒として活動を再開する。この当時、ピーパー師は、思想的には、上座部仏教から次第に大乗仏教に関心を向けるようになっていったようで、一九五〇年代はじめには、チベット仏教系のグループで、一九三三年にアナガリカ・ゴヴィンダ師（1898-1985, Lama Anagarika Govinda）によって創設されたアーリヤ・マイトレーヤ・マンダラ（Arya Maitreya Mandala）の書記長も務めている。(8)

このピーパー師が真宗の教えに最初に触れたのは、すでにロンドンで稲垣最三師（一八八三―一九八一）との文通によって真宗の手ほどきを受けていたジャック・オースチン師（Jack Austin, 1917-1993）との出会いであったが、(9)本格的に親鸞の思想に関心を寄せるようになった直接のきっかけは、『歎異抄』の独訳でも知られる池山栄吉師（一八七三―一九三八）の門下である花田正夫師（一九〇四―一九八七）の感化を受けた山田宰氏（一九二三―

一九八七）[10]がベルリン工科大学留学中の一一九五四年五月に、ドイツ仏教協会において開講した親鸞思想の講義を通してであった。[11]またピーパー師が、日本の浄土真宗の教団（浄土真宗本願寺派）と関係を持つようになったのは、同年一一月にベルリンを訪問した大谷光照門主（一九一一―二〇〇二）との出会いであったとされる。[12]ピーパー師は、一九五四年の大谷光照門主との出会いが契機となって、二年後の一九五六年に、ピーパー師が友人のオスカー・ノイマン氏（Oskar Neumann）とともに、ヨーロッパで初めての浄土真宗の教えを中心とした仏教協会を設立することになる。そして、ピーパー師によって創設された、ドイツ真宗協会の組織を通しての活動が源流となり、現在、浄土真宗のグループはヨーロッパ各地に展開しつつあるが、ピーパー師は、それらのグループのコアとなった第一世代の信徒たちの指導者であった。[13]

ピーパー師と独訳『歎異抄』の出会い

このようにピーパー師と浄土真宗本願寺派の教団との関係の由来は、同師に関する文献でもすでに明らかにされているように、大谷光照門主との個人的な出会いを通してであることはまぎれもない事実である。ではピーパー師は、親鸞の思想のどのようなところに惹かれて真宗の信徒となったのだろうか。

ピーパー師がドイツ語を通して親鸞の思想に本格的に触れるきっかけを作ったのは、当時ベルリンに留学されていた物理学者の山田宰氏であった。ピーパー師との最初の出会いの様子を山田氏は次のように記している。

私が初めてピーパー師にお会いしたのは、一九五四年五月十六日、ベルリンのフローナウで開かれた仏教寺院のお祭りに参加したときでした。私は当時一九五三年より物理工学研究所とベルリン工科大学で磁気学を研究

する目的でドイツに留学していたのです。私とピーパー師との最初の出会いはやがて師とそのメンバーとの親密な交わりへと進みました。私は師の自宅で毎月第二、第四土曜日に開かれる定期集会で話をする機会を与えられたのです。(14)

山田氏が訪れたというこの仏教寺院とピーパー師の関係がどのようなものであったかということについては、ジャック・オースチン師による次の記述が参考になる。

当時、アーリヤ・マイトレーヤ・マンダラはフローナウにある寺院を管理しており、私たちはそこで会合を開いていた。しかし、セイロンのテーラヴァーダ仏教徒がそれを買い上げ、彼らはしばらくするとテーラヴァーダ仏教徒の集会以外の使用を許可しないようになった。ただ、この寺院の管理者として派遣されてきた二人の比丘はドイツ語を話すことが出来なかったので、この管理はあまりうまくは行かなかった。ベルリンではもう一つの別の寺院が計画されており、またハリーも真宗の寺院（礼拝堂）設立に全力を注いでいた。(15)

山田氏が参加したこのお祭りというのは開催の時期を考えると、テーラヴァーダ仏教徒のウェーサカ祭であり、またその後はピーパー師の自宅での集会で講義をされるようになったということからも、当時、アーリヤ・マイトレーヤ・マンダラのメンバーでありつつも、ピーパー師が独立した活動を目指していた様子が知られる。当時、アーリヤ・マイトレーヤ・マンダラはチベット密教の伝統に組織のルーツを求めつつ、テーラヴァーダを含めて全ての仏教の伝統を受け入れるとしていたが、純粋な真宗の信仰を求めるピーパー師のグループの活動とは次第に相容れ

ないものとなっていったようである。[16]

山田氏のベルリン留学の主たる目的はもちろん磁気学の研究であったが、先にも述べたように山田氏は花田正夫師の門下で求道されており、また留学にあたっては、花田師から繰り返し聞かされていた「ドイツ人には『歎異抄』がわかる」という池山師の言葉と「池山師のドイツ語訳『歎異抄』[17]を通じてドイツ人に真宗に親しんでもらいたい」という花田師の願いを少しでも実現することを望まれていたようである。したがってピーパー師の集会での講義はこの池山師の『歎異抄』独訳にもとづいたものであり、ピーパー師も『歎異抄』をドイツ語で読み解く中で親鸞思想を体解していかれたようである。[18]

山田氏がピーパー師の真宗入信について語る中で、大変興味深いのは、ピーパー師が山田氏の講義に初めて強い関心を示したのは、同氏が『歎異抄』第十三条の「またあるとき、唯円房はわがいふことをば信ずるかと、仰せの候ひしあひだ、……なにごとも こころにまかせたることならば、往生のために千人ころせといはんに、すなはちころすべし」の一節であるが、これは、師の戦争体験と重ね合わせてみるとよく理解できるであろう。[19]そして、山田氏が「ピーパー師の真宗の理解は、我々が『歎異抄』を一緒に読み進むうちに深まってゆきました」[20]と記されているように、ピーパー師の真宗入信にはこの独訳『歎異抄』との出会いが決定的役割を果たしたと考えてよいだろう。

池山氏の独訳『歎異抄』との出会いが、ピーパー師にとってその後の求道の支えとなったことは、ドイツ文学者の芦津丈夫氏（一九三〇―二〇〇一）のピーパー師についての回想録にも記されている。芦津氏は一九六〇年から一九六二年にかけてベルリン自由大学で研究留学中であり、その際に、ピーパー師と交流されているが、一九六一年に[21]、師の努力によってヨーロッパ初の真宗独自の礼拝堂を訪れた際の想い出を次のように記している。

わたしは今でも、ブレンターノ街の礼拝堂の入口に故池山栄吉教授の『歎異抄』第一章の翻訳が記された一枚の紙が掛けられていたのをはっきりと覚えている。

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏まふさんとおもひたつこころのおこるとき、すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり。

これは親鸞聖人のあらゆる人間へのメッセージであり、同時にこれはピーパー師がドイツの同朋に寄せた、自己の信仰告白であるとも受け取られた。(22)

大変な努力でようやく設立にこぎ着けることが出来た礼拝堂の入口に、池山栄吉師の独訳『歎異抄』を記した紙を掲げていたことからも、ピーパー師がドイツ語で語られる親鸞の言葉を通して親鸞の教えに導かれ、その教えに生きようと決意されていたことがわかる。

ピーパー師の「無対辞」の宗教的生活の実践

ピーパー師の真宗入信に関して、大変興味深いところは、師の真宗入信のきっかけとなった山田宰氏のドイツ語による親鸞思想の講義では、池山栄吉師の独訳『歎異抄』だけでなく、山田氏自身が準備した、近角常観師（一八七〇―一九四一）の『信仰の余瀝』や福島政雄氏（一八八九―一九六〇）の『近代思想と信仰』などの独訳が用いられたことである(23)（『ヨーロッパの妙好人』33-34頁）。また一流の科学者である山田氏の親鸞思想の解説は、真宗に触れたことのない西洋の近代の知識人を聴衆に、個人の信仰として親鸞思想を紹介するというスタンスであっただろう。また山田氏の求道の師である花田正夫師は本願寺派との関係が深いが、花田師の師事した池山栄吉師は大

谷大学の教授であった。しかし、池山師も花田師も、特定の教団とは一定の距離を置き、自立した求道者として親鸞思想の実践を目指した、近代的な日本の真宗思想家たちであり、その親鸞理解には浄土真宗の特定の教団との関わりはあまり感じられないのである。

それゆえに山田氏は、二人が出会って数ヶ月後のことであるが、ピーパー師がベルリン訪問中の西本願寺の門主と面会した際に、師が「ベルリンの西本願寺協会の代表になりたい」と言い出した際に、特定の宗派の代表という肩書きにこだわるかのようなピーパー師を見て、その信仰の純粋さについて疑問を抱き、その場では、率直にいってあまりよい感じを持たれなかったことを、次のように記している。

> 一九五四年十一月十六日に大谷光照ご門主がベルリンに来られたときのことでした。ピーパー師はベルリンの西本願寺協会の代表になりたいこと、またベルリンの仏教協会を浄土真宗の方向に変えてゆきたいとの希望を表明しました。これを聞いたとき、実のところ私はあまりよい感じを持ちませんでした。というのも、私は組織よりも信仰の方がもっと重要なことであると信じていたからです。師が本当の意味で阿弥陀様に出会うことが大切であって肩書きなどなんの意味も持たないと思ったのです。(24)

しかし、山田氏がそこで感じた、ピーパー師に対する一抹の不信感は、後に師から受け取った次のような手紙の文面から杞憂であったことが分かったとされる。

> 過去数年来、たくさんの日本の教授方が私を訪問してくれました—なぜだか理由がさっぱりわかりませんでし

たが。先生方は我々の理解を容易にするために学問的、哲学的な用語を使ってご本願の不思議な力を説明しようと随分骨を折っておられました。しかし私たちはなぜあの方たちがそんなことをしなければならないのか、いつも不思議に思ったものです。そんなことは全く必要なかったのです。…今でも私は『歎異抄』を毎日読んでおります。そして私の人生の終わるまでにこの小冊子を完全に読み終えることはできないものと信じています。なぜなら私はその中にいつも新しいものを発見するからです。(25)

この手紙から読み取れるように、ピーパー師は『歎異抄』を通して、日々、新たに親鸞に出会うという宗教体験を深めていかれたようだ。ピーパー師にとって『歎異抄』の言葉は、「日本からこられた先生方」が語る近代的な学問の言説や、哲学的に説明される「対立相克」の対辞する言葉ではなかった。そしてこの手紙に記されたピーパー師の言葉には、肩書きにこだわり、人を導く師になるというような気持ちは全く感じられないのである。

ピーパー氏が『歎異抄』から感じ取ったのは、柳宗悦が「無対辞文化」というエッセイで、東洋の宗教的言説の特色として取り上げている「対立相克の生活」から離脱した宗教的生活を表現する言葉、反面に相対する言辞のない「無対辞」の言葉であり、(26)それゆえ、ピーパー師にとっては『歎異抄』の言葉は毎日読んでも読み終えることが出来ないものでありつづけたのだろう。

ピーパー師は山田氏への手紙の中で、続けて晩年になって衰えてゆく自分を見つめつつ、自己の信仰の実践について、次のように語っている。

自然のなりゆきとはいえ、私も見るからに年を取ってまいりましたし、また病気のためにだんだん弱くなって

きました。…しかし繰り返しますが、私はそれにも関わらず幸せです。そしてこれはひとえに阿弥陀様のすべてをもれなく包み込むお慈悲のたまものであり、わたしはただ感謝する以外にはないのであります。このご恩報謝のために、もし希望する人があれば、私達に力と幸せを与えてくれるこの教えを他の人たちにお伝えしようと思っております。これが、私の命のつづく限りつとめたいと思っていることです。こうした経験はどんな巧みなお名号の説明よりも人を納得させるものです。そこで私はあなたに確信を持っていえるのですが、学問や知識ではこの光明の世界に私達を導くことはあり得ない、それはただ揺るぎない「信」のみによって可能なのです。(27)

このピーパー師の宗教体験は、柳が「無対辞文化」の中で述べている、「対辞に縛られる生活」から離脱した、「無対辞の心境に活き得た」人の宗教的実践であるといえよう。(28)

またピーパー師と親交が厚く、晩年にはドイツ真宗協会の支援者であった、小児科医のファレンティン・フォン・マルツァン博士は、このような師の宗教家としての資質について、追悼文の中で次のように述べている。

[宗教家としての]師の特別な資質とは「如何なる特別な資質をも持とうとしなかったこと」であった。これという特別な資質がなくても、仏道は誰にでも開かれている、と考えていたのである。バスに乗り合わせた隣の人が腹を立てていても、その人に好意的に耳を傾けること、たとえ人がすぐに来なくても、また予定しているとおりにこなくても辛抱強くその人を待つこと、如何なる偉大なる言葉もかたることなく、如何なる崇高な志ももたず、いまなさねばならないことを行い、わが身のもとにやって来るものをただ受け入れること、そし

て向こうからやって来るものを憧れて期待したり、心配して恐れおののいたりするのではなく、み仏を信じ、すべてを自分のうちに良き出来事として受け入れること、それがピーパー師のすがたであった。[29]

ピーパー師にこのような宗教的生活の実践をなさしめたのは『歎異抄』に込められた東洋思想の影響であることは言うまでもないことである。しかしここでもう一つ注目しておきたいのは、ピーパー師が読んだ『歎異抄』は池山氏の独訳であり、また同氏の親鸞思想の理解は、日本語という言語を通してではなかったという点である。

ピーパー師は健康上の理由もあったが、通常ヨーロッパで親鸞思想に関心を持つ他の仏教徒とは非常に異なり、日本から招聘されてもそれに応える事なく、[30]生涯一度も来日する事はなかった。また日本語を深く理解したり、そうしようと努力した様子もみられない。ピーパー師は、当時、数少なかった英文の真宗関係の書物等をドイツ語に翻訳しつつ真宗を学び、欧州各地の信徒や日本の友人達とはドイツ語や英語での文通等を通して交流し、自分の言葉で親鸞思想を語り伝えたのであるが、その真宗理解には日本語や日本文化の影響というものはあまりみられないのである。にもかかわらず、ピーパー師が「妙好人」と慕われる念仏者であったのは、柳宗悦の言葉を借りて言うならば、ピーパー師が親鸞の思想に向き合う時に、日本語や日本文化という「対辞の根」が切られていた[31]ことによるものであったといえるのではないだろうか。

おわりに

ピーパー師において「妙好人」と呼ばれるような宗教的人格の形成が可能となったのは、柳の言う「無対辞」の宗教的生活が、特定の言語（辞）の壁を超えて体解出来る普遍性を持つものであることを示しているのではないだ

ろうか。また日本語ではなく独訳の『歎異抄』との出会いによる入信と言う点から見ると『歎異抄』の言説自体が特定の言語（辞）の壁を超える「無対辞」の言葉からなっているという事もできるのではないだろうか。最後にピーパー師が、どうして「妙好人」と言われるべき人であったのかについては、ピーパー師の影響を受けて真宗に入信した、彼のドイツの友人、フリードリッヒ・フェンツェル氏の追悼文に言い尽くされているであろう。

ピーパー師は、ドイツ、否ヨーロッパの仏教史上希有なる人であった。師は、多くの仏教注釈書を書くような学識深い仏教学者でもなく、人を感動させる弁舌家でも、また仏教の大教団を組織しようとする人でもなかった。師の純粋で率直な、荒々しいことを嫌う生き方、深い人間性と、生きとし生けるもの、悩める人に対する慈愛に満ちた精神の態度、そして阿弥陀佛の慈悲への不動の信心のうちに、深い仏教者の姿、つまり当時のドイツにはみられなかった「妙好人（myokonin）」が体現されていた。そのような妙好人として、師はドイツの仏教の歴史に足跡を残すだけでなく、友人や後を慕う同行の想い出の内に生き続けるであろう。南無阿弥陀仏[32]

註

（1）本稿は二〇一三年度、國學院大学において開催された日本宗教学会第72回学術大会のパネル「妙好人における無対辞の思想」での発表「ヨーロッパの妙好人と「無対辞」の思想」の原稿（パネル発表の要旨は『宗教研究』八七巻別冊（二〇一四年）九五―九六頁に掲載）に加筆訂正を加えたものである。

（2）柳は「無対辞」を「〈対辞〉（Anti-thesis）とは、〈相対する言辞〉の意であるから、〈無対辞〉とは、反面に相対する言辞のないことを意味する」と定義している（柳宗悦「無対辞文化」『柳宗悦全集』19、七一二頁）。柳の「無対

辞」の思想が、その思想的到達点であるという評価については、中見真理氏（中見真理『柳宗悦―時代と思想―』東京大学出版会（二〇〇三年）、二七三―二七七頁）、関口千佳氏（関口千佳「無対辞の思想 ―『美の法門』（柳宗悦著）を読む―」『文学・芸術・文化：近畿大学文芸学部論集』17-1（二〇〇五）、二一―三六頁）等の論考を参照されたい。

（3）柳宗悦「無対辞文化」、七一二―七二九頁。このエッセイにおいて、柳は妙行人赤尾の道宗、因幡の源左、物種吉兵衛、三河のお園等を取り上げている。柳はそこで妙好人が体解していたという「無対辞」の暮らし（「安心の生活」）について「吉兵衛言行録」をひいて次のように述べている。

「吉兵衛言行録」に次のような話が載せられてある。嘗て彼がある人から侮蔑された時、少しも腹を立てないので、居合わせた友人が不思議に思って、その故を尋ねると、彼が云ふには「いやいや、私も凡夫だから腹は立つのだが、根を切ってあるので、実らないのだ」と答へたといふ。どんな根を切ってあるのであらうか。私に云はせると、「対辞の根」が切られゐるのである。かくして無対辞の心境にゐる故、立つ腹が立たなくなってくるのである。……つまり「勝負」とか、「憎愛」とか、「黒白」とかいふ、もろもろの対辞が消え去る世界で暮らしてゐるのが、妙好人の「安心の生活」だとゐへる（柳宗悦「無対辞文化」七二一頁）。

（4）柳は「基督教内にも、妙好人に類する人は定めてあるであらう。私の知ってゐる範囲では、ブラザー・ローレンスの如き人は妙好人と云ってよいであらう」（柳宗悦「妙好人の存在」『柳宗悦全集』19、四三七頁）と述べている。中見真理氏は、鈴木大拙の『百醜千拙』（大正一四年刊）の「家醜 二」の第五章にあたる「行者ローレンス」（『鈴木大拙全集』17、二七七―二八七頁に収載。）という文章を通して、柳はローレンスの存在を知ったと考えておられる（中見真理『柳宗悦―時代と思想―』第11章の注(24)、三六二―三六三頁）。なお柳のこの文章は、全集の解題（「柳宗悦全集』19、八九〇頁）にあるように、昭和二七年に春秋社から『鈴木大拙選集』第六巻として刊行された、大拙の妙好人についての論考集の解説（二二三―二三一頁）として書かれたものである。ただし大拙は本書でローレンスについて直接に言及するところはないようだが、両者の浅からぬ関係がうかがわれて、大変興味深い。

（5）中見真理氏は、柳は「無対辞を東洋の思想の特徴として描き出していたが、それを日本や東洋だけに見られるものと見なしていたわけではない」とし、無対辞が西洋にも開かれているという事実を、ホイットマン、ブラザー・ローレンスや、無名の中世の一聖者の言葉等に見いだすことで、アンチテーゼ（対辞）の超克という現象（無対辞）の普

遍性を言おうとしていると考えている（中見真理『柳宗悦―時代と思想―』二七三―二七七頁）。ただし、柳の考えるように、たとえ事実として存在していても、西洋の宗教的伝統の中では、マイスター・エックハルトが異端者とされた如くに、それが受容されることがなかったという点から、柳は無対辞が東洋思想の特徴であると主張するのであろう。

（6）フリードリッヒ・フェンツェル「ある友の想い出」国際仏教文化協会編『ヨーロッパの妙好人―ハリー・ピーパー師―』永田文昌堂（一九八九年）、六四―六九頁。

（7）残念ながらこのベルリンのグループ自体は、組織としては決して大きなものとはならなかったが、ピーパー師は、ドイツ国内だけでなく、イギリス（ジャック・オースチン師）、スイス（ジャン・エラクル師）、ベルギー（アドリアン・ペール師）などの人々とは、主として文通によって念仏者を育てられた。現在、ヨーロッパ各地で熱心な活動を続ける浄土真宗のグループにとって、このピーパー師の下に結成されたベルリンの浄土真宗協会は、その信仰のルーツであったといえよう。以下、本論におけるピーパー師の事績とヨーロッパにおける浄土真宗の展開の歴史については、国際仏教文化協会編『ヨーロッパの妙好人―ハリー・ピーパー師―』永田文昌堂（一九八九年：本書はハリー・ピーパー師追悼号として発刊された *The Pure Land Journal*, vol. 2, no.1［一九八〇年］の和訳である）、国際仏教文化協会編『ヨーロッパに広がるお念仏―ヨーロッパ念仏伝播小史―』増補改訂第二版、永田文昌堂（二〇一〇年）、および佐々木恵精「世界に広がる念仏者の姿―海外の念仏者を訪ねて2―」『季刊せいてん』96（二〇一一年）四八―五一頁を主として参照した。

（8）稲垣久雄「ハリー・ピーパー師―人とその生涯―」、『ヨーロッパの妙好人』六―七頁、ジャック・オースチン「ハリー・ピーパー師―ヨーロッパにおける浄土真宗の先駆者―」『ヨーロッパの妙好人』二一―二五頁、国際仏教文化協会編『ヨーロッパに広がるお念仏』四〇―四一頁等参照。

（9）国際仏教文化協会編『ヨーロッパに広がるお念仏』四二頁、ジャック・オースチン「ハリー・ピーパー師」、二一―二二頁参照。

（10）岡山大学理学部教授であった山田宰氏は、ドイツ留学当時は名古屋大学の所属で磁性物理学がご専門であった。山田氏は名古屋一道会で花田正夫師の感化を受けられている（国際仏教文化協会編『ヨーロッパに広がるお念仏』一八頁）。

(11) 山田宰「ピーパー師と歎異抄」『ヨーロッパの妙好人』三二―三九頁。

(12) ピーパー師はこの出会いをきっかけに真宗に帰依することを表明し、アーリヤ・マイトレーヤ・マンダラを離れ、ヨーロッパではじめて「純粋な真宗のグループ」を発足させることになった。稲垣久雄「ハリー・ピーパー師」八頁、ジャック・オースチン「ハリー・ピーパー師」二三―二四頁、国際仏教文化協会編『ヨーロッパに広がるお念仏』二〇頁等参照。

(13) 国際仏教文化協会編『ヨーロッパに広がるお念仏』四二―四五頁。

(14) 傍線筆者、山田宰「ピーパー師と歎異抄」三二頁。

(15) ジャック・オースチン「ハリー・ピーパー師」二五頁。

(16) 稲垣久雄「ハリー・ピーパー師」、八頁、ジャック・オースチン「ハリー・ピーパー師」二三―二四頁。

(17) 池山栄吉師の独訳『歎異抄』の諸版には下記のものがある。

初版：Eikitschi Ikeyama *Tannisho: das Buchlein vom Bedauern des adweichenden Glaubens* Kyoto: Bukkyo-Gakkai 1919。

再版（原文対訳付）：Eikitschi Ikeyama *Tannisho: das Buchlein vom Bedauern des abweichenden Glaubens (mit dem Japanischen Texte) / ubers., erlautert und eingeleitet von Eikitschi Ikeyama* Kyoto: Hozokan 1940。

再版：Eikichi Ikeyama *Tannisho; das Büchlein vom Bedauern des abweichenden Glaubens* Tokyo, Risosha, 1965。

(18) 山田宰「ピーパー師と歎異抄」三二―三四頁。

(19) 山田宰「ピーパー師と歎異抄」三四―三五頁。

(20) 山田宰「ピーパー師と歎異抄」三五頁。

(21) この年は親鸞聖人七百回大遠忌の年でもあるが、あの悪名高きベルリンの壁が作られた年でもある。

(22) 芦津丈夫「ベルリン礼拝堂の想い出」『ヨーロッパの妙好人』六三頁。

(23) 山田宰「ピーパー師と歎異抄」三三―三四頁。山田氏によると、福島政雄氏の『近代思想と信仰』は、Karl Alber 社から一九五六年に独訳タイトル Die Freiheit und der Glaube として出版されたが、近角常観師の『信仰の余瀝』（独訳タイトル Perlen des Glaubens)は未刊のままであるようだ。

(24) 山田宰「ピーパー師と歎異抄」三五頁。
(25) 傍線筆者、山田宰「ピーパー師と歎異抄」三五頁。
(26) 柳宗悦「無対辞文化」七一二―七一三頁。
(27) 傍線筆者、山田宰「ピーパー師と歎異抄」四三頁。
(28) 柳宗悦「無対辞文化」七二〇―七二三頁。
(29) ファレンティン・フォン・マルツァン「わが友・わが師―ハリー・ピーパー師」『ヨーロッパの妙好人』一七―一八頁。
(30) ピーパー師は一九六一年の親鸞聖人七百回大遠忌にあわせて訪日するように招待されていたが、再三再四の説得にも関わらず辞退していたことが芦津丈夫氏の回想録にも記されている。辞退の理由としてピーパー師は自身のアメリカ軍基地での通訳としての仕事と、自身の健康状態を理由にしているが、芦津氏はピーパー師が招待を辞退した第三の理由としてベルリンに真宗のグループのための礼拝堂を創ることが、当時のピーパー師にとって最優先のことであり「自分が特別な賓客として京都でもてなされるよりも、どれほど小さくてもベルリンに礼拝堂を創設することのほうがはるかに大切であるとかんがえていた」（芦津丈夫「ベルリン礼拝堂の想い出」五五頁）からだとされている。またこのピーパー師の希望は大遠忌と時を同じくしてかなうことになったのである（芦津丈夫「ベルリン礼拝堂の想い出」五二―五五頁）。
(31) 柳宗悦「無対辞文化」七二一頁。
(32) フリードリッヒ・フェンツェル「ある友の想い出」『ヨーロッパの妙好人』六八―六九頁。なお「妙好人」ということばは、ドイツ語原文においても、またその英訳でも *myokonin* と記されている。Friedrich Fenzl, "Erinnerungen an Einin Freund" *Pure Land Journal*, vol. 2, no.1 (1980), p. 4（英訳："Memories of A Friend," p. 7）参照。